

先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト 3年間の成果と今後の見通し

柴本枝美

(奈良教育大学 先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト)

生田周二

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター (人権・市民性教育研究部門))

赤沢早人

(奈良教育大学 教育実践開発研究センター (教育実践研究部門))

赤井 悟

(奈良教育大学 先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト)

Outcomes and Future Perspectives of Project for the Development of a Model System for Teaching Profession Subjects

Emi SHIBAMOTO

(Project for the Development of a Model System for Teaching Profession Subjects)

Shuji IKUTA

(Center for Education and Research of Sustainable Development and Cultural Properties)

Hayato AKAZAWA

(Center for Education Research and Development)

Satoru AKAI

(Project for the Development of a Model System for Teaching Profession Subjects)

要旨：平成22年度から始まった「先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト」(略称:教師力プロジェクト)は、平成24年度に最終年度を迎えた。本稿では、本プロジェクトにおける3年間の成果と課題を明らかにし、今後の見通しを示した。本プロジェクトにおける具体的な成果目標は、①教職科目群と教育実習科目群の再編・体系化、②学生の「教師力」の涵養であった。前者については、平成24年度から教員養成に一本化された教育課程で実現されたといえる。また、後者については、教師力サポートオフィスの設置をはじめ、教職ノートや教師力ループリック、ケースメソッド教材の開発など、体系的な学生支援システムを構築してきた。今後の課題としては、全学的な取り組みの中にこの成果を位置づけることがあげられる。関連する部署との調整を現在進めているところである。

キーワード：教師力 teacher competencies 学生支援 students supports
教職科目 subjects for teaching profession

1. はじめに

教員の資質能力をめぐるのは、これまでさまざまな議論がなされてきている。1997(平成9)年7月に公表された教育職員養成審議会の第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、子どもたちに生きる力を育てるため、教師に特に必要とされる資質能力が示された。それは、①地球的視野に立って行動するための資質能力、②変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、③教員の職務から必然的

に求められる資質能力の三つである。この答申に続く、第二次答申、第三次答申をふまえ、2002(平成14)年2月の「今後の教員免許制度の在り方について」、2006(平成18)年7月の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」を経て、教育職員免許法が改正された。ここに示された教師に求められる資質能力は先に挙げた1997(平成9)年の答申に基づくものであり、優れた教師の条件として、2005(平成17)年の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、①教職に対する強い情熱、②教育の専門家として

の確かな力量、③総合的な人間力、の三つの要素が示されている。

2012（平成24）年8月28日に出された中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」¹においては、グローバル化など社会の進展の中で、学校に期待される役割が変化してきていることから、ICT活用や特別支援教育の充実、社会全体の高学歴化や外国人児童生徒への対応、また、いじめや不登校等生徒指導の諸課題への対応など、さまざまな課題に対応しなければならないことを指摘している。そして、これらの課題に対応できる教員に求められる資質能力を、①教職に対する責任感、探究力、自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）、②専門職としての高度な知識・技能、③総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）の三つに整理している。②については、さらに、教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報科、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）、新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探求型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）、教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力の三つがあげられている。

答申では、このような資質能力を向上させるために、教員養成の改革の方向性として、教員養成を修士レベル化し、高度専門職業人として位置づけることが示されている。教員免許制度の改革の方向性についても述べられており、修士レベル化によって取得できる「一般免許状（仮称）」と、学士課程修了レベルの「基礎免許状（仮称）」、さらに「専門免許状（仮称）」の創設が示されている。基礎免許状（仮称）を取得するためのカリキュラムについては、「教員になることの魅力やすばらしさとともに厳しさを感じさせる体験を積む」ことや、教科に関する科目と教職に関する科目を架橋する内容を展開することなどが示されている。

奈良教育大学（以下、本学と示す）の教員養成課程においては、＜新任教師に求められる資質能力目標に基づく教員養成のためのカリキュラム・フレームワーク＞（Nara University of Education Curriculum Framework for Expert Teachers : Nue Cuffet 以下、Cuffetと示す）で示された七つの資質能力基準に基づき、授業科目の構造化が全学的に試みられてきた。その検討過程において出されたカリキュラム改善のアイデアは、結果的に先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト（略称：教師力プロジェクト）として結実した。本プロジェクトは、平成22年度から3年間のプロジェクトとして、概算要求特別教育研究経費（高

度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）「先端的な教職科目体系のモデル開発—カリキュラム・フレームワーク（Cuffet）の構造的深化・高度化による学びの組織化—」に採択されたものである。

本プロジェクトでは、「卓越した教師力」の育成を中心に位置付け、教師力の獲得を支援する体系的なシステムづくりをめざしてきた。具体的な成果目標として、①教職専門科目群と教育実習科目群の再編・体系化、②学生の「教師力」の涵養があげられる。これらの目標を達成するために、深化＜ふかめる＞、基準設定＜めざす＞、教職科目群体系化＜つなぐ＞、まなびネット＜ささえる＞という四つの取り組みを柱に展開してきている²。

本稿では、本プロジェクトにおける3年間の取り組みについて概要を紹介し、その成果と課題、今後の見通しについて述べる。

2. 学生支援システムの全体像

学生が「教職の学び」を深め、「教師力」を涵養するためには、学生自身の学びを支える環境や条件を整備し、支援システムを構築することが必要である。本プロジェクトでは、教師力サポートオフィスおよびモデル教室を整備し、教職ノート、教職検定、教師力ルーブリック、ケースメソッド教材など、学生支援のためのツールを開発してきた。以下、それぞれについて報告していきたい。

2. 1. 支援の“場”の設置～教師力サポートオフィスおよびモデル教室

教師力サポートオフィス（以下、オフィスと示す）は、学生自身が「教職の学び」を深めるために、自らの到達状況を把握し、自己評価しながら「教師力」を身につけ、理想の教師像に近づくための支援を行うために設置したものである。また、教師力モデル開発プロジェクトの事業を支える拠点として機能している。

オフィスには、教科書と指導書、および教職の学びに関連する図書や映像資料を収集し、配架している。後者については、本学の教員、学生、附属学校園の教職員から推薦のあった図書である。貸出について、教科書、指導書は、一時持ち出しのみ、原則として当日返却としている。教職の学びに関連する図書および映像資料については、2週間の貸出が可能である。

これらの図書のうち「教師力100冊」と名付けている図書群は、教師をめざす学生自身が、4年間の学びの目標、内容、方法を明確に意識し、自らめざす教師像を具体的にイメージすることにつながることを期待して選定した図書および視聴覚資料である。選定基準としては、「(1) 教師としての一定のモデルを提示するもの、実践記録、教材として利用可能な図書、見

童生徒理解を深められるものなど、自らめざす教師像、身につけたい教師力をイメージするにあたって、示唆を得られるものであるかどうか。」「(2) 学校、幼児・児童・生徒、教師を主たるテーマとする内容であるかどうか。」という二つの観点から吟味し、プロジェクト会議の承認に基づいて収集し、配架している。

オフィスに所蔵されている「教師力100冊」以外の図書については、先に挙げたCuffetに基づいて分類している。学生が自らの学習履歴を振り返ったとき、不十分な項目については、読書や映像視聴によって補うことができるよう、整備しているところである。

また、大学祭ではオフィス主催の講演会と座談会を企画してきた。講演会では、学級崩壊、虐待、不登校といったテーマで現職経験のある先生方から講演していただき、その後の座談会は、もう少しフランクに現場の先生と語り合える機会として設定した。学生の参加はそう多くはなかったものの、参加した学生からの感想をみると、現場の生の声を聴く機会となったように思われる。

大学祭企画等でも使用しているモデル教室には、学校教室に近い形で模擬授業等を行うことができるよう、机・いす(24セット)、黒板(前・後)、電子黒板等を配置している。現在、採用試験対策や、教師力の育成に関わるサークル活動等で活用されている。

2. 2. 学生支援のための“ツール”～教職ノート、教師力ルーブリック、ケースメソッド教材、教職検定

本プロジェクトでは、学生支援のためのツールとして、「教職ノート」「教師力ルーブリック」「ケースメソッド教材」「教職検定」の開発を進めてきている。ここでは、開発中のものも含め、これらのツールについて、詳細に説明していきたい。

まず、「教職ノート」である。これは、自分の目指す教師像に接近するにあたって、学生自身の大学内外における学びを蓄積し、学習履歴を振り返るときの資料として用いることを目的として開発してきた。卒業生を対象に行ったアンケート調査や、これまでの試行をふまえ、平成24年度版は「インフォメーション」「ワークシート」「シラバス」の三部から構成することにした。平成24年度版の掲載内容について以下の表1に示す。

「インフォメーション」は、さらに二つに分けるこ

表1 「教職ノート」(平成24年度版) 掲載内容

1. 学生プロフィール	11. 3つのカリキュラム系列
2. 教職ノートの使い方	12. めざす姿～教師力100冊
3. 教師力とは?	13. カリキュラム履修記録
4. 学校・園の1年間の計画	14. 各年次のまとめ
5. 教員のさまざまな職	15. 教育実践との出会い(異化体験)
6. 教育職員免許状	16. ケースメソッドによる教師力育成
7. 教員採用試験	17. 理論知・実践知統合帳
8. 学校の組織と決裁	18. ブックレビュー
9. 奈良教育大学カリキュラム・フレームワーク	19. 教職入門
10. 履修記録(学務情報システム)	20. 現代教師論

とができる。まず、本プロジェクトの取り組みを含め、本学における教員養成カリキュラムについて説明した部分である。たとえば、「教職ノートの使い方」「奈良教育大学カリキュラム・フレームワーク」「3つのカリキュラム系列」など、表1の番号で言えば、2、3、9、10、11、12にあたる。「3. 教師力とは?」では、本プロジェクトで検討してきた「教師力」について解説している。ケースカンファレンスや、奈良県優秀教職員へのヒアリング調査をふまえ、教師力を構成する要素とそれらの関係をモデルで示し、本プロジェクト

表2 教師力ルーブリック(開発中)の一部

Cuffet項目	内容・観点	育成中 実習前	育成中 実習後	標準 (卒業時)	卓越 (将来像)
1 学校教育の 課題把握	<教職に関する事項> ①教職の意義 ②教員の役割 ③職務内容 ④子どもに対する責務 <教育に関する事項> ①教育の目的・理念 ②教育の歴史・思想 (近代学校教育制度の成立、戦後新教育の展開、民間教育研究運動、学習指導要領の変遷、道徳教育をめぐる歴史的背景など) ③人権 ④教育関係法規 ⑤社会構造と教育との関わり ⑥現代社会の教育課題(学力問題など) ⑦生涯教育	(1)教職・教育に関する左記に示した事項について、説明を聞いたことがある。 (2)学校にはさまざまな教育課題があるということを、漠然と把握している。	(1) 教職・教育に関する左記に示した事項について、説明を聞かなければ理解することができない項目がある。 (2) 学校における現代的な教育課題があるという事実に基づき、教育実習などに基き、具体的な事例を挙げるができる。	(1) 教職・教育に関する左記に示した事項について、理論と実践の両面に関連づけながら理解することができている。 (2) (1)を踏まえて、学校教育における課題を、教育実習やスクールサポート等の経験をふまえた具体的な事例とともに、3点以上指摘することができる。また、その解決策を得る手段を理解している。	学校教育をめぐる最新の情報を得られるように常にアンテナを張り、最新の教育情勢をふまえて、現代的な教育課題を把握し、具体的な解決策を得るためには何を調べたらよいか、どこに聞けばよいかを理解している。そして、見いだした解決策をふまえて対応にあたることができる。また、新たな課題にぶつかったときにも、これまでの経験をふまえ、同僚や先輩教師から支援を受けながら、対策を練ることができる。

で検討してきた教師力を説明している³。

もう一つは、現場に出るために知っておくべき基本的な内容から成る。たとえば、「学校・園の1年間の計画」「教員のさまざまな職」「教員採用試験」など、表1の4、5、6、7、8にあたる部分である。掲載する内容については、卒業生アンケートにおいて、「大学時代に、授業としてもっと学びたかったことなど、大学への要望がございましたらお聞かせください」という質問への回答からも示唆を得た。

「ワークシート」としては、「学生プロフィール」「カリキュラム履修記録」「教育実践との出会い（異化体験）」「理論知・実践知統合帳」（表1の1、13、14、15、16、17、18）などを設けている。これらのワークシートについては、教員養成カリキュラムにおける実践系列科目や教職系列科目との関連づけをしながら、4年間の学びの履歴を示す証拠の一つとして活用することができるよう関連部署と調整しているところである。

「シラバス」については、1年次配当の教職専門科目である「教職入門」「現代教師論」の資料を挟み込んでいる。今後は、新教育課程の学年進行に合わせ、実践系列科目である「教育実習スタートアップ」「教育実践基礎演習」「教育実習事前事後指導」「教職実践演習」のシラバスを開発し、追加掲載していく予定である。平成24年度については、後述する「教育実習スタートアップ」の試行において、教職ノートと同じフォーマットで作成したワークシートを配布している。

次に、現在開発中の「教師力ループリック」について述べる。表2にその一部を示す。「教師力ループリック」は、教師力に関する評価基準である。主に教職専門科目に関わるCuffet 5項目、すなわち、「1 学校教育の課題把握」「4 授業力」「5 児童・生徒理解と教育実践への具体化」「6 学校と地域社会との連携」「7 職能成長」について、育成中（実習前）、育成中（実習後）、標準（卒業時）、卓越（将来像）の4尺度を設け、それぞれの尺度における学生の姿を指標として示したものである。

この「教師力ループリック」は、学生にとって、現在自分がどの段階に到達しているかを確認し、今後の学習計画をたてるための指標となる。同時に、教員にとっては、各科目の目標・内容・配当時期などの適切性をつねに点検し、見直しを図っていくための基準として機能する。なお、「卓越」の段階については、奈良県優秀教職員へのヒアリングをふまえ、教職大学院との連続性も視野にいれながら検討を進めてきている。当面の活用として、教職実践演習における学生の振り返りの基準として用いることを検討している。

また、学校現場で起こりうる様々な困難に対応するための学習教材として、「教師力を育むケースメソッド18」を開発した。タイトルの一覧を表3に示す。こ

れらの事例について本学の学生サークル「劇団キラキラ座」の有志が演じた動画は、ウェブサイトから閲覧することができるようにしている。

この18の事例を用いて、採用試験前の4年生を対象

表3 教師力を育むケースメソッド18

1	子どもが突然教室から飛び出した！
2	授業中、教師の目を盗んで工作作品へのいたづらがあった
3	子どもの靴がなくなった
4	女子生徒との関係がうまくいかない…
5	人の気持ちを逆なでする言葉を言う生徒の指導
6	児童の身体に青あざや傷がある
7	障がいがある児童への指導
8	生徒が「中学校の数学なんて大人になって役に立たない！」と言う
9	手洗い場におう吐した後があった
10	授業中、火事に！！
11	自治会長が先生の服装へ苦言
12	仕事がトリプルブッキング！
13	運動会で保護者が暴言
14	給食費が滞納されている…
15	「いじめられている。」と保護者が突然来校
16	学校でのケガで保護者のクレーム
17	挨拶指導の効果を検証したい
18	学級懇願会での話

にケースメソッドを試行した。ケースメソッドの手順としては、まず示されたケースを読み（もしくは、動画で見て）自分の見解をもち、続いてグループ討議の中で、自分の見解を昇華させていく。そして最後にファシリテーターから問題の背景、関連知識、判断についての解説等が加えられるという流れで展開する。

ケースメソッドの試行に参加した学生は、「現場に出れば、このような問題（ケンカする児童や掃除をさぼる生徒への対応）に直面した場合には、即座に対応しなければいけないのは自分。そのことへの自覚と、適切な対応への素地を学ぶことができた。」「（ケースメソッドを行った90分は）教師になってからあらゆる場面での確な判断を下すための訓練の時間だった。」と感想を述べてくれていた。また、ケースメソッドに示された状況を解決するにあたって、自分の見解の変化を自覚した学生もいた。実際に学校現場で適切な判断や行動ができるようになるには、経験の積み重ねが必要ではあるものの、このケースメソッドにより、現場で起こりうる場面的一端に触れ、最適解を求めて考えることの必要性については意識することができたのではないかと考えている。

このほか、教育実習として現場に関与する前に、最低限知っておくべき知識を確認するための「教職検定」を開発し、現在試行しているところである。

3. 教職専門科目群と教育実習科目群の再編・体系化

次に、本プロジェクトの具体的な成果目標の一つ、教職専門科目群と教育実習科目群の再編・体系化について述べる。本学では、平成24年度新入生より総合教育課程を廃止し、教員養成課程に一本化した教育課程を実施している。奈良教育大学・教員養成カリキュラムと名付けられた本学の教育課程の企画・設計段階において、本プロジェクトは「学部改組委員会」へ多くの提案を行った。

これまで現行の教育課程においては、もちろん教育職員免許法上の指定条件をクリアしているものの、各科目の配当年次やその系統性に改善の余地があるという指摘がなされてきていた。具体的にいえば、1年次配当のⅡ欄科目である「現代教師論」のあと、3年次の「教育実習事前・事後指導」まで、実践に関わる科目が必修科目として設定されていなかったこと、「教育基礎論」が1年次後期から3年次後期まで配当されていたことなどである。このような状況をふまえ、教員養成課程として一本化するにあたっては、①4年間を見通したバランスの取れた科目配置を行うこと、②科目の種類や特性に応じて、科目間の関連性を明確にする「系列」を設けること、により教育課程のリニューアルをめざした。その結果、図のような教員養成カリキュラムが今年度から実施されている。

その特徴をあげると、たとえば、実践に関わる科目の系統性を改善するために、「実践系列」において、

	教科系列	実践系列	教職系列
4後		教職実践演習	
4前		応用教育実習	
3後		教育実習事後指導	理論と方法 特別活動の 理論と方法
3前	初等教育 基礎指導	教育実習 教育実習事前指導	生徒指導・ 教育相談Ⅱ
2後	初等教育 教育法	教育実践 基礎演習	カリキュ ラム論 教育実習 指導
2前		教育実習 スタートアップ	教育実習 指導Ⅰ 教育実習 指導Ⅱ
1後	小学校 教科科目 ゼミ	現代教師論	教育実習 指導Ⅰ 教育実習 指導Ⅱ
1前	大学の 学び	教職入門	教育基礎論 教育心理学

図 小学校教員養成カリキュラム・マップ

新設科目として1年次に「教職入門」、2年次には「教育実習スタートアップ」「教育実践基礎演習」が設置され、3年次の「教育実習」4年次の「教職実践演習」につなげられるよう編成されている。

また、「教育実習スタートアップ」については、先行実施という形で平成21年度から試行を続けてきている。教育実習スタートアップの目的は、①来年度教育実習に赴く2年生に対して、教育実習の内容と方法に関する基本的な知識を得させること、②教育実習に向かう態度（構え）を醸成すること、である。観察するにあたっては、教育実習生の立ち居振る舞いと、子どもや指導教員・同僚実習生との関係性の築き方を中心に“みる”ことを伝え、参観する際の注意点、服装等について事前指導を行った。平成24年度の試行については、表4の通りである。

参加した2年生の感想をみると、授業づくりにおけ

表4 平成24年度教育実習スタートアップ 実施内容

	幼稚園	小学校	中学校
事前指導	2012年9月5日、12日、21日の3回実施 参加を希望する学生は、いずれかの回に出席		
実施日	2012年10月1日	2012年9月27日	2012年9月19日 (社会) 2012年9月21日 (国語) 2012年10月1日 (美術)
参加 学生数	幼児教育9名	教育学2名 国語1名 社会科4名	社会科 11名 国語 8名 美術 10名
参加形態	研究保育の観察 事後協議会への参 観	研究授業の観察	研究授業の観察 事後反省会への 参加
引率教員	堀越、柴本	赤沢、柴本	今、棚橋、宇田
事後指導	10月4日昼休みに実施		

る教材研究の重要性を改めて認識し、今から教科専門の知識をしっかりと蓄えておく必要を感じた、また、授業では児童生徒から予期せぬ質問が投げかけられることがあることを目の当たりにし、指導案作成の段階で児童生徒の反応を予測しておくことの重要性を実感した、といった感想がみられた。次年度に教育実習をひかえた学生にとって、教育実習までの1年あまりで何をすべきか、自分に問いかける機会となったことがわかる。

4. おわりに

このように、本プロジェクトの3年間の取り組みは、学生が「教職の学び」を深め、「教師力」を身につけることにより、理想の教師像に近づくための支援

の拠点として、教師力サポートオフィスを設置することに始まり、「教職ノート」や「教師力ルーブリック」、ケースメソッド教材など、様々な学生支援のためのツールを開発してきた。また、平成24年度より実施されている本学の教員養成カリキュラムへの提言を行い、平成25年度より本格的に実施となる教職実践演習の実施支援にも取り組んできた。この二つが本プロジェクトの成果としてあげられるだろう。

今後の課題としては、本プロジェクトの3年間の取組の成果を、本学の教員養成カリキュラムや、日々の指導の中にしっかりと位置づけることがあげられる。具体的には、次年度より本格実施となる教職実践演習において、学生に教職の学びを振り返らせる際の指標として教師力ルーブリックを活用することや、教職実践演習をはじめとした教職専門科目で、ケースメソッド教材を活用することなどがあげられる。また、教師力サポートオフィスについても、プロジェクト終了後も継続して学内に位置付けられるよう、関連する学内組織との調整を進めているところである。本プロジェクトの成果をふまえ、教師力の獲得をめざす学生の支援が充実していくことを期待している。

注

- ¹ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm (2012年11月14日確認)
- ² 本プロジェクトの概要及び平成22年度の取組みについては、拙稿「奈良教育大学における教師力向上の取組み—先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクトの1年目の成果と課題—」(『教育実践総合センター研究紀要』第20号、2011年3月、pp.245-249)を参照されたい。
- ³ 教師力モデル図、奈良県優秀教職員へのヒアリングの詳細については、赤井悟他「教師力の形成と成長についての調査研究—平成23年度奈良県優秀教職員へのヒアリングから—」(『教育実践開発研究センター研究紀要』第22号に収録)を参照されたい。